

雌蝶

泉鏡花作

—

路地を入りかけて、不圖胸騒ぎのしたのは、丁ど  
過般のやうである。——其の時は飛んだ騒動、今  
夜は又格別ひつそりして居る。が、はつと立窘むま  
でに、氣を打つた心地は同じであつた。

過夜は小火、

今夜は祝言。

世の中に、どんな狼狽ものがあつても、小火と祝  
言を一緒にする事はない。が、しかし考へて見ると、  
「絲卷」の一人娘が、婿を取る日の、宵の口の、  
近所合壁の動搖は、案ずるに小火と大差はなかつた  
らう。仔細あつて此の話をする男は、午  
から他所へ行つて居て、其の様子はさて見なかつた  
が。

そんな事から、何も似たやうな思ひがしたのでは  
ない。

尤も、拔裏の木戸を入らうとして、ぎよつとした  
段は、今夜も過般も些とも違はぬ。其の小火の時は

確か、然う、表町の床屋へ行つた歸りが

けで。――

七日ぶりのおめかし、殊の外綺麗になつて、翌日見合に出掛けると云ふ譯でもないが、直ぐに湯に入るつもり、腹は空く、聊か卑しい言種ではあるが、是頃なり、腹は空く、聊か卑しい言種ではあるが、是で熱湯は些と堪へる。

湯は晩飯を済ましてからと、しやぼん箱を手拭で巻いたなり、懐へ突込むので、少し襟が開いて、尚ほ薄寒いのを、早く掻合はせれば可いのに、いけ不精な懐手。蕎麥屋の角を曲つて、横町の慶庵の前をぶらりと通り、左へ曲つて、深い溝について垂々と下りると、下切つた右が一段高い、此處が路地の裏木戸で、此の地内の鬼門に當る。

其處まで來ると、わや／＼四五人、中には片襷で裾を端折つた、鬘の女房も交つて、人立ちして、中を覗込んで居たのがはじまり。

細い路地を七八間、絲卷の裏圍について、左へ又細いのを曲ると、二階家、平家が、夕霞の中に浮出

して、三方から取圍んだ池のやうな植込みが、此の  
地内に一つ。舊、茶畑であつたなごりには、茶の樹  
の垣を取廻して二十坪ばかり。北に向合つて、地主  
の竹垣。庭を前にした座敷の縁側が、其の一方をづ  
らりと仕切る。路地内の誰彼は、これを公園、と洒  
落に名づけた。

其の時は未だ咲かず、今は最う散つて、花片のや  
うな美しい葉になつたが、公園には紅梅の樹がある、  
白梅、李、桃の樹も、松もあつて、中に其の梅松に  
梢を並べた、木瓜の大きなのが一本ある。

絲巻は、下町の然る金物屋の妾だつたのが、旦那  
が亡くなつた忘れ記念の綾子に、此の地所と、四五  
軒の家作がついて、母娘ぐらし。乳母と女中で男を  
交ぜない。主婦が今も髪長く、脊の高い所爲か、此  
處に生える烏扇、雁皮も皆丈がよく伸びる。一昨年  
だつたか、烏が上の李へ来て、羽についた種を落し  
たらしい、忽然として其の下へ芽ぐんだ鶏頭の一種  
は、山鳥の羽を倒に懸けたやうになつて、文、凡十  
三尺。路地内の住人、物干から小手を翳して、彗星、  
と呼はつた事さへある。

公園の紫薄く萌えはじめた、如月の末の夕霞、恰も幻の羽衣襲撃く、樹々の梢に遮られた、此處から見て、筋違の瓦屋根が我が家は可いが、茶の樹に掛つて、斜めに畝つて、樹の根を巻いて、丁ど其の見當へのおたり込んだ唧筒の管は何うだらう。

四邊は一面の水になつて、宛然海蛇が、アノ虎斑のある、ぶよ／＼した、横ひだに蒼い水氣を持つて膨らんだ、だぶりと肥い胴體を横へて居るのに違はぬ。

言ふまでもなく、人混雑黒山の如く、地内を塞いで、跣足もあれば、肌脱もあり、向 顔卷をしたのもあるし、駈廻つて巡查も居た。

既に木戸口の人立ちを見た時から、人殺しか、見投げか、必定事こそあれ、と顛倒して駈込んだのであるが、我が家へ向けて、蒸氣唧筒のかゝつたのを見た時の、心持は一寸言へぬ。

尤も見受けた處、屋根の形が原の通りで、其處等

の様子も一騒動の、一呼吸吐いたらしいから、さし  
たる大事にも到らなかつたものであらうが、然りと  
ては近所の手前、それは内には老人がある。

ブル／＼と震へると、寤んだ足が最う先へ出ぬ。  
 其まゝ無意識に裏木戸の方へ引返したが、我ながら、  
 大なる犯罪者でゞもあるやうで、恐ろしいまで四邊  
 の人目が憚られたので。

足も地につかず、木戸を出る時、其處に顔を知つ  
 た近所の米屋の女房が居たので、又ぎよつとした。  
 幸見付からずに横町へ出て、床屋から歸つたとは  
 逆に、ばた／＼と駈出した。

我家で、粗相火を出したものなら、何も恚うした  
 からと云つて、其の罪を遁れ終せらるゝのではない  
 が、知つたものに捉まつて、

「やあ、お宅が、」  
 と眞向から、浴せられては、差當り其の挨拶に困  
 つた處から、一寸伸びを遣つたらしいが、咄嗟には  
 自分ながら、扨て然うとまでも氣が付かないほど、  
 とつちて居た。

横町の中ほどにある、質屋の庫の前の、右も左も薄暗い處へ、ト先づ蝙蝠のやうに身を密めて、後前を密と伺ふと、屋越に聞ゆる、がや／＼した地内の聲が、一々己を責め立てる城下に迫つた敵の聲かと胸に應へる。いや、疾くの昔、兵糧責めの晩飯前と寒さは寒し、髯を剃立ての頤も、今の間にげつそりと瘦せたやうで、胴震ひを一ツして、廂合から喟然として天を仰ぐ。下界は騒ぐ。とも思はぬ色で、あゝ、二日月。

上が市兵衛町の崖を離れて、麻布の我が店借りの其の公園の上に白い、梢を、に、つて、梅も、桃も、枝を蒼く染めて居よう。

思へば夢見たやうである。其の周圍を、あの、人、數、あの騒動。黄昏を宛然、道陸神が喧嘩をするやうな。

しかし夢ではあるまい。地内は其の混雑で、未だ何の家の障子越にも、戸の隙にも、燈の影は見えなかつたが、此處から見る、表通は早や夜で、突當り

の荒物屋の店の洋燈は、毎時見る煤びたのであるが、宵の明が薄り冴々と點いて居る、と其ま  
で確に見えながら、未だ依然として目が覺めぬ。夢  
ではない、と落膽したやうに其の灯を熟と見た。

時に其の灯影はづれに、店前へ踞んで、膝から支へて、頤杖で表を見て居た。荒物屋の婆さんの態度と言ふのが、何となく、如何にも無事で、平和で、町内 安全の權化でゞもありさうに見受けられる。

此なら其の前を何事もなく通してくれようー  
又通つて差支へのないほど、自分にも罪がなさうに、格別寛大に見て取られたので、爲に少なからず力を得た。

其處で、懐から手拭を出して、だらりと提げて、小さな咳をして、藏の壁を離れて出たが、此の舉動は、何の爲めだつたか今以つて些とも分らぬ。

で、角屋敷の質屋の瓦斯燈に照らされて、湯歸りめいた其の姿は、出端に然うして居る婆さんの目に

入つて

尤も急足で通つたが、

「まあ

」とも何とも聲を懸けぬ。

ヤレ難有い。是で若し粗相が我家で無かつたら、  
祝ひの赤の飯は、壽留女を添へて、眞先に此の婆さ  
んに贈らうと、早や外してはあつたが、伊勢屋の暖  
簾の前を過ぎて、同じ家の、忍返ししのびがへの嚴重な黒堀くろべいに  
ついて曲る。

此處が路地の表口で、裏とは違つて、路も廣い。

一方は其の取廻した質屋の堀、左の角から三軒目  
の我が住居は無事であつた。人の瀬は自家の出格子  
の前から淀んで、鄰家の勝手口へ渦うずいて居たのであ  
る。

最も路地は水びたしで、水筋の、未だ蜘蛛手にさ  
ら／＼と走るのを、もう、此方のもので悠々と跨い  
で歸ると、格子戸の前に、黒の石持の紋着、抜衣紋、  
腕組をした襦袢の袖口、ゆつたりと亘んで居たのは、  
渾名を船頭さん、と云ふ我が同宿の男で。

おなじに浮世繪を

其の勉強しながら、身

體をゆら／＼と前へ揺る癖がある、漕ぐやうだ、と

云ふので其處で船頭。

いつもゆつくりと氣永なのが、流れるやうな濕り  
の前に、呑氣に立つた處なぞ、小火は是だけでも消

えたらう、と嬉しかった。

「何うしたんだい、まあ。」

「やあ、お歸り。飛んだ騒動で、しかし、お

めでたうございました。」

其處で、船頭に聞くと、鄰家が内務省の一寸した官吏の、主人は餘所へ廻つた日、退省が遅く、細君は湯に行つた。留主の書生が、よくある粗相で、洋燈を点けようとした燐火の燃さしを、石油罐の中へ落したのだ、と言ふ。

「ドン！と云ふ音で、えゝ、縁側にぽかんとして居た私は、鄰家で襖でも倒したのだらうと思ひましてな。大して氣にも掛けないで居りますと、其途端に何でして、筋向うの、あの、斑犬ですがね、ウゝウゝと唸り出しました。其の可厭な聲と云つたら。」

や、大きな地震でもぐら／＼と來やしないか、と可訝く茫とした時でしたな。

お船頭さん、何でせうね。

と臺所を働いておいでなすつた、露月町の姉さんが、がらりと何です、水口の戸をお開けなすつたつけ。

あれ、

と云ふと、ばら／＼と駈けて来て、禪がけの濡手のまんま、六疊に居なすつた、お祖母さんの手を引拵むと、火事です、ツた切ー疾い事、もう遁出してお了ひなすつた。はあや、其の時の顛倒さ加減たらありませんでした。まあ、何しろ結構で、

先づ祖母に怪我もなし。

難有い事には、上框の障子に映る、内の燈火も景氣が可い。と思ふ其の障子へ、鼻筋の通つた横顔と、簪の影が美しくほつとさして、すらりと蓮葉に一枚開けて、花やかな藤紫の裾の、白足袋で敷居に乗つて、玉のやうな顔を出した、目の大きい、眦の切れた、ふつくりとした、括頤だが面長の所爲で薄く見える、緊つた口許の可愛らしい、臍長けた眉

の、前髪まへがみの膨りふつくとした、これが絲卷いとまきの一人娘ひとりむすめで、今年こと十七しになる綾子あやこと云いふので、顔かほを見ると、いきなり、

「あら、先ちゃんせん

」

と来たき。

其その浮世うきよ繪ゑを描かく處ところから、誰たれに教をそはつたか、先生せんせいと云いふ處ところを、此方こちらで綾公あやこうと行ゆくから、先さきでも先ちゃんせんと來くる。尤もつとも、學校がっこうの繪畫くわいぐわの清書せいしよを内證ないしよで描かいてくれ、と強請ねだられて、畏かしこまつて候まうと、芭蕉ばせうの葉はに蝸牛かたつむりか何なにか手本てほん通どほりに書かいて渡わたすと、たつた六十てん點てんしか取とれなかつたので、ぶツノ、怒おこつた。――此このくらゐな腕うでだから、「先ちゃんせん」で先まづ恰好かつかうである。

「大變たいへんよ、一寸ちよいと、」とたしなめるやうに云いつて眞顔まがほになる。

「大變たいへんは最もう去いつ了ちまつた、綾公あやこうに宜よろしくツて。」と澄すまして土間どまへ入はひ、と驚おどかすつもりあての的あてが外はうれて、

「まあ、」

と目を圓くして熟と見ながら、朱鷺色の、へりの細い、羽二重の筒袖の、胡蝶の羽で、くるツと包んだやうな腕を露はに、障子のふちに高くかけて、細い額の中のやうに上から見て立つて居るのを、押退けなければ入れないから、先生は其處で立停つて、

「ふゝゝ、」

と笑ふと、お船頭も格子の外で、

「遣られましたな、令嬢、あはゝ、」

「口惜い、私、」

「先ちゃんが歸つたかい。」

カチリと膳立ての茶碗の音、臺所から露月町の姉さんと云ふのが聲を懸けた。

私の従妹で、年紀下ながら、遊びに来る綾子が、姉さん姉さん、と云ふし、其の従弟で、高等學校へ通ふのが、露月町の家は、些と賑な稼業で、人出入が多い處から、勉強しに、此の住居へ来て居るのが、同じく姉さん、と云ふ處から、家中　――　祖母までが、姉さんや。

此この姉ねえさんは、時とき々／＼遊あそびながら、臺だい所どころの整せい理りに來くるので、祖とし母よりは何なんにも構かまはず、女ぢよ中ちゆうは少わかし、男をとこ世じ帶たいも同どう然ぜんだから。

露ろ月げつ町ちやうのは二十はたちを一をツ二にツ越こして居ゐるが、恐おそろしく綾あや子こと仲なかよしで、一を昨と年し、越こ立したてには一ち寸よ々い々／＼來きたのか、此この頃ころぢや、最もう兩りやう方ほうとも殆ほとんど連れん日じつのお入いりであつた。

四

今も路地内の混雑の中を、寒い晩方、其の袖の大きい翁格子の銘仙の羽織の袖を、一寸手の中へ折込んで、肩を細うして、擦抜けて来て居たものらしい。

「否、」

と臺所へ向いて大きく云つて、莞爾して、

「黙つていらつしやいよ、姉を擔ぐんだから、」

と低聲で云つて、目で知らせて、笑を忍んだ音を含めて、

「些とも歸りはしないんだわ。」

はて、妙な言種な、しかし兎も角も是までは聞え  
たが、

「一寸、お湯へ行つて來たの、」  
と直ぐに尋ねる。

又これが些とも忍んだ調子でない。此の娘は棚橋へ通つて居る、其處の繪畫の代作をして、漸と六十點の所帯であれば、言はずとも大概奥行は知れて居

るのに、今泣いた鳥が最う笑ふ、これぢや袂も擔が  
れない。が、そんな事は一向お構ひなし

(綾ちゃん、)

(はゝい、)

(又遊びに行くのなら、御飯が済んでからにおし

よ。)

乃至は、

(お温習をなさい!)

で、母様にぴたりと出足を留められる。其でも我慢が出来ない、と密と座敷を抜出して、拔足差足玄關へ、一寸づゝ一生懸命、呼吸を殺して戸を開ける。までは可いが、後を閉めるのはがらんぴしやりー 横飛びに路地を駈けて、鳥のやうに飛込むと、誰でも構はぬ、居合はぜた者の肩さきへ噛りついて、

(かくれて来たの、あゝ、恐かつた、まあ、可かつた。)

と長い膝で崩れたやうにがつくり坐る、と叩きつけた戸のがらん、鈴の音の其のがら／＼が、未だ響

いて居ようでないか。

いや腹を抱へさせる。

これだから、人を擔がうと云ふ本人と、話聲の如何などを分別する事ではない。

「あゝ、可い湯だつた、」

と手拭を提げて居たから、可加減に答へると、ひよいと蹲んで、今度は仰向いて圓い目で見上げながら、

「あの、お湯屋にね、先生、」

大分慇懃だ、と不思議に思ふと、眞面目に教が受けたいのであつた。

「湯花ツて、花は、どんな花？」

「茅花ぢやないか、」

背後から、船頭が、

「三助董の事でせう、」

「然うか、成程。」

と堪らなく笑ひ出すと、以ての外な顔をして、

「まあ、静しづかになさいよ、聞きこえるわ。」

と今いまになつてむきに留とめた。

「かついだね、此この娘こは、さあ、こちよ／＼／＼

／＼／＼。」

と不意ふいに露月町るげつちやうのに擦くすくられて、くるりと倒たふれて、

圓まるくなつて、牡丹ぼたんの花はなが轉ころがるやうに、

「あは／＼、御免ごめんなさい、御免ごめんなさい。」

此この娘こが今夜こんや、三々九度さんざくじゅうどをするのである。

否、最う式は濟んだであらう。餘處から歸つて裏木戸へかゝつた時は、彼是一時近であつたから。其に近所の此の寂然となつたので分る。式も早や、床杯も納つたらう。

勿論一人娘であるから、糸巻へ婿、養子であることは斷るまでもない、――さて其の養子と云ふのは、色の白い、上方ものゝ醫學生である。

姓を篠田と云ふのだが、縁は不思議なものであつた。

去年の秋、従妹が誘はれ、二人づれで、向島の秋草見物。午飯を濟ましてから出掛けたが、途中で綾子の方は兎も角、従妹なぞは止せば可いに、女同士、白木屋の二階を覗いて、其れから淺草へ行くと、綾子が観音様を附あつたかはりに、従妹は水族館に引張られる事になつた。あの薄暗い隧道の中を見て歩行くと、入り口邊から、一人後になり前になり、

二人の目にちら／＼して、海を通りものゝするやうに、硝子に映る、色の白い、鼠の洋服を着た年少な男があつたが、出口近くで、ひらりと白いものを落して、其のまゝ見えなくなつた。

「何か落してよ、」

と綾子が拾ふと、其は名札で。

「一寸、醫學生　――　篠田

「そんなものはお打棄り、」  
と携り取る勢で従妹の云ふ時は、もう其を忘れたやうに摘んで提げて、綾子は硝子越に透通る水の上から、鯛の大きな目を指の尖で突いて居た。

「大きな針刺だわね。」

行路は東橋を。百花園へ入つたが、従妹は花の映る、綾子の顔に見惚れたと言つて話す　――　白芙蓉の面に清い瞳がくる／＼と動いたり、嫁菜に睫毛が濃くなつたり、紅蓼に眉が伸びたり、紅蜀葵が簪に擦れたり　――

「おほ、可愛い、」

と桔梗きんぎょうに口紅くちべに。其その間に萩はぎが袂たもとに搦からむ。葛くずがはら

／＼と背せに翻かへる、  
又また少し風かぜがあつた――

見た目めに残のこつたか、大川おほかはべりを歸かへり路みちには、隅田すみだの水みづがもみぢに早はやい、花はなの錦にしきを紅くれなゐの夕日ゆふひに宿やどした。

途とちう中ちゆうトある土堤どての下したの、濕じめ々くした藪やぶの蔭かげに、ぱつと咲さいて火花ひばなを散ちらしたやうな、曼珠沙華まんじゆしやげを見付みつけて、

「姉ねえさん、あれは」

「彼岸ひがんぢやないか。」

「綺麗きれいだね、」

「あゝ、だけれどもね」

「百花ひやくくわ園えんにはなかつたよ。」

「あゝ、庭こはなんかへは植うゑないものなの。何故なぜつ

て？ 花はなが咲さく時ときは一枚まいも葉はがないし、葉はのある時とき

は花はながないの。だから縁起えんぎでないでせう。綾あやちゃん、

お前まへさんは、花はなよ、お前まへさんの母おつかさんは、まあ、葉は

だわ、どつちが缺かけても大變たいへんぢやないか。」

「まあ可哀相ねえ、葉がないからつて、こんな處に此の花ばかり、一人ぼつちで寂いわ。」

で、わざ／＼舞踏沓を汚して、折つて、一束胸へ抱いたのを見ると、被布にかゞつた総のやう。

言問の前まで返る、と従妹は向うから一人が杖を支いて、洋服の些と反身で来る、少い男を見た。

近づくまゝに、此方を見て笑ひかけたので、急いで、綾子の袖を引いて、何も知らせまいと、恰も可で茶屋へ入つた。

其處でお汁粉を、あとで勘定をしながら、伸上つて見ると、最う何處にも其の男の姿はなかつたから、落着いて、徐々出る。

是非船で、と綾子言ふので、渡場にかゝると、背後から、すいと来て、今度は二人に擦違ふばかりに、前の男が船へ下りた、最う其の棹を突く處。

「お待ち、否、何故でもさ。」  
わけは言はず、従妹は此方の岸に立つて、一船後  
れて乗る算段。

「まあ、あの山谷の景色を御覽よ、待乳沈んで梢  
乗込むと言ふんぢやないか。」

首尾よく後の船に乗つて、中流に出た、と思ふと、  
フト又氣にかゝつた雲がある、向うの棧橋にイんで、  
誰か此の船を見て居るのが、どうやら同じ男らしい。

胸は浪とゝもに揺らめいたが、次第に判然と見  
えて来た、其の男が、然も眞白な半巾を、招ぐが如  
く掉つて居る。

「其をお打つちやり、皆さんが笑つて居る、そん  
な草を持つてるから、」

「然う、」  
と惜しさうだつたが逆らはないで、

「お前も百花園おいでな。」

曼珠沙華は、はら／＼と、船べりに掛つて水に落ちて、一度引寄せられたやうになつて、颯と亂れて、白魚が寄りさうに、篝火かと影がこぼれた。

熟と俯向いた目を上げた時、綾子が、あゝ、棧橋の其の半巾を見つけた。すつと靡いて、風に絞られて、ゆら／＼と伸びたのを。

「一寸、白百合のやうだわねえ。」  
従妹は悚然としたと言ふ。

船が着くと、誰にするともなく、四五人乗合の中へ軽く會釋して、莞爾して、其の男は一人すた／＼と山谷の方へ行つて了つた――

「だから、袴なんぞ穿いてお出掛でないと云ふのに、学校の規則だつて。それだから、あんな魔が魅します。前垂がけで御覽なさい、職人はからかつたつて、學生は目をつけないのに。もう、庭へ白百合はお植ゑなさるなよ。」  
と従妹がいきせいで言ふから、

「馬鹿な、百合の花が知つた事か。」

と私は笑つたが、此の話を聞いた時、何となく綾子の運命のほどが思ひやらるゝやうな氣がした。

果せる哉、其の歳の暮の事、一日、來がけに寄つたと云ふ絲卷の内から、従妹が此方へ駈込んで、

「大變よ。」

今日、綾子が學校のかへりがけに、トある下宿屋の二階の縁から、インキ壺がころがり落ちて、礎とぶつかつて袴を汚した。

驚く處へ、箒を持つたなりの學生が飛んで出て、掃除の不注意、飛だ粗相、まあ、入つて下さい、と引張る。可いわ、と言ふ。でも相濟まぬ、それではお詫ひながら、御邸へ伺はうと、今綾子を送つて來て、平にわびをして居るのがね、其の過般の向島の。

ちゃん／＼め、撲れ、と高等學校へ行く従弟は息まく。大分町内が物騒で、へゝゝ、と船頭は身鱧を

揺る。就中苛立つたのは、政といふ同人で、これは  
一ツ内に住むのではないが、毎日のやうに來て矢張  
畫を描く、芝の植木屋の悴。

「さあ、火事だ、畜生、天窗から水を浴びせる。

生命を惜んで消防夫がなるか。」と握拳で鼻頭を

引擦つた。

近頃こんな話がある。政の親父の夥伴だと云ふ、小石川大塚邊の植木屋が、築土の方へ仕事に行つた。仕事先に祝があつて、一杯馳走になつた處から、夜が更けて、第六天の暗闇を入つて、折れて切支丹坂へ上らうとする坂の下で、慄然として急に心持の悪い冷汗が垂々。踏切つて上り掛けると、何事もなかつたが、其の時の身の毛の慄立つたと云つたらない。

其處で翌日又仕事に出掛に、同じ坂を下りて、確か昨夜此處で慄立とした、と見ると、石垣の角の草の上に、竹の皮包みを開いて、黒豆の入つた飯を供へて、塗箸の新しいのが立てゝあつた。何かの禁厭にしたものらしいが、朝露にも崩れず、未だ日に乾かず、冷々として白かつた、と云ふ。

其を丁ど思出した。裏の路地口は眞暗だし、俄に總毛立つたといふのもこんなのだらう、と考へたが、串戲にも儀式にも迷信にも、婿取の晩、木戸口へ赤

飯を装りつける法はあるまい。

恚う又他愛のない事を思つたのも、實は爾時と同  
一やうな胸騒ぎがする、又火沙汰ではないかと危ぶ  
まれる、其の可憐い念を、自分で打消さうとしたの  
であらう。

空は眞暗で星一ツない。然うかと云つて、今が今  
降出しさうにも思はれぬ陽氣だつた。で、夜は遅く  
ても方々軒明の残つた、辻には茶飯屋も居る明い表  
町から、つか／＼と横道へ切れたから、目が未だ馴  
れない所爲で、こんな時は、段々目の曇が拭はるゝ  
やうに、星が見えはじめめるものである。

胸の動悸を、恚う打傾いて聞くやうにしながら、  
薄氷を踏むとあるが、今夜の溝板がソレと云ひたい。

暗闇の路地を擦抜けるやうにして、取着きの絲巻  
の裏圍から、ぐいと引ツこぬくばかりに、身體を例  
の公園と竹垣の間へ出ると、向うの角に斜かひに、  
綾子が一件の其のがらんのついた格子戸の前が、地

紙の形の空地になつて、眞中に絲卷、とした瓦斯が一基立つて居る、其の茫として赤い灯で、忽ち大變なものを見て、震へ上つた。

「是だ！」

目の前に、邪慳に、自棄に、放り出したと云ふ風に、引傾げて、尤も、物だから打倒れはせぬけれども、粗略に置放しの駕籠一挺。

唯見ると今時見馴れない目には、恰も人無き里に於ける乾坤一草亭の観があるし、あの柄を兩方に開いた形は、仙人が作つた偉大なる折鶴の、風を待つて翻然と虚空へ舞上りさうにも見える。

「遣ツ附けたな、」と思はず口に出たのを、咽で殺して息を詰めて棒立ちになつた。

く 蓋し此の謀叛の頭人や、植政で、豫て聲言して曰  
世にも可愛い綾ちゃん

「一生一代、晴の祝言と云ふ時は、絲卷揃ひの半纏で、白の振袖に緋鹿子の長襦袢と云ふ、山の手一番の姿を昇がう。」

尤も婿取りだから外へは出すまい、地主が澤瀉の提灯をつけて、此の路地の中をぐるりと廻るだ。」

「可からう。」と従弟が机を敲くと、

「是非ね、私は一番肌脱で鐵棒をつきませう。」

と其の姉が喝手と云ふ。

が、是は未だ養子の話の極らなかつた前の事で。

「其のかはり女房が何と云はうが、當畫長屋の連中が目鑑に叶はん田舎ものを授けようとしたが最後、其の駕籠ぐるみ引ニつて逐電だ。」

「けれどもですな、政君、其の場合に於て、どつちにしる、令嬢を駕籠に乗せる、と云ふ事をですな、先方で承諾をいたしませうか。」とお船頭がぐら／＼と膝を揺る。

變<sup>へん</sup>な顔<sup>かほ</sup>をして、政<sup>まさ</sup>が大<sup>おほ</sup>いにひるんだから、  
「何<sup>なに</sup>それは可<sup>よ</sup>からう。半<sup>はん</sup>纏<sup>んでん</sup>を揃<sup>そろ</sup>へて、駕籠<sup>かご</sup>を据<sup>す</sup>え  
て、此<sup>こ</sup>の顔觸<sup>かほぶ</sup>れで、づらりと並<sup>なら</sup>んで、へい、御祝儀<sup>ごしうぎ</sup>、  
と云<sup>い</sup>つたら、路地内<sup>ろぢうち</sup>だけなら聞届<sup>きとど</sup>けよう。一寸親<sup>ちよいとあや</sup>た  
ちは澁<sup>しぶ</sup>つても、綾公<sup>あやこう</sup>は何時<sup>いつ</sup>も玉乗<sup>たまの</sup>りの眞似<sup>まね</sup>をする形<sup>かた</sup>  
で、屋根<sup>やね</sup>から飛乗<sup>とびの</sup>るよ。」  
と私<sup>わたし</sup>が勢<sup>せい</sup>をつけたので、一つシヤンと占<sup>し</sup>めて取極<sup>とりき</sup>  
めてあつたのである。

いづれ一度は、其の祝儀をせねばならぬが、どうぞ駕籠のまゝ逐電するのでなしに、絲巻の揃ひで路地の中を廻られますやう、従妹は神佛に、可愛い、罪のない、虚榮のない、氣取り氣のない、色氣のない、雛を宛然活かしたやうな綾子のために――信心して居た程だった、――今度の婿は實に温順しい、學問好きな、人づきの可い、而してしんせつな、行届いた思遣りのある方だと云ふ。

學校でも大層出来たが、お氣の毒な、故郷に據ない事が起つて、學資が續かなくなつたもんだから、中途でよして、これから一本だちで内務省の試験を受けるんだつて、下町の一醫者へ助手に行つて、夜は勉強して、大層見立てが上手で――、患者の中には、若先生に、と名ざして來るのが大分ある、と先づ女中が近所へ觸れた。

但根生ひの江戸兒で、主婦は竹を割つたやうな氣象だし、女ばかりだし、内福で苦勞はせず、富士

が砂利になつた、と言つても、目に見るまでは、決して人を怪まない。

澁谷邊で汽車が衝突した。居まはりの親類の縁側へ、女の腕が一ツ斜ツかひに乗つたし、恐しい響がしたと思ふと、打ツつかつて窓を破つて、結綿に結つた娘の首がばさりと落ちたが、さした花簪がまだゆら／＼して居た、と恚う聞いて信じて居るから、懷紙を銜へて、チヨンと鴨居へ乗つたと云つても、恐らくは疑ふまい。

其の内に、丁ど、と云つては可訝しいが、主婦にはさし込の持病がある、陽氣のかはりめには節々惱むが、大概は合薬で間に合ふけれども、些と仕こじつた時は醫師を呼ぶのを、僥倖だ、と醫學生の許へ駈付けた、事があつた。

少きドクトル、唯一匙を振つて、立處に平癒となつた處から信仰は彌が上。

妙なもので、何時でも醫者が間に合つて、直ぐに

治る、と氣がゆれる、と持病の方でも我儘が出ると  
覺しく、是までにない、一寸々々起る、と直ぐに學  
生が駈けつける。一晚なんざ、枕許へ着切で、夜徹  
し看病をしたとかで、親身も及ばぬ、と主婦は喜ぶ。

さあ、侍醫が出来たも同然で、皆がぴん／＼達者  
な時でも、時候が悪いから一寸診てあげませう、と  
脈を取る。是に甘えるやうになつて、少し頭痛がす  
る、ソレ篠田さん、些と食過ぎた、ソレ篠田さん、  
となつた時分に、――

「御愼みなさい、そんな事で薬は上げられませ  
ん。」

と斥ける、と薬は賣らぬ豪いもの、と尊くなる。  
緩急時を得たもので。

その内、絲巻の袋戸棚の中に、薬剤瓶がづらりと  
並んだ。

さて改めて披露に及ぶ、――養子と云ふのは其  
である。

是より以前、一度は、今日はと入つて行く従妹を見て、座敷で御飯を食べて居た學生が、ふい、と奥へ隠れた。二度目の時は、平氣で長火鉢の前の座蒲團に坐つて、京焼の――従妹が心を罩めて綾子に贈つた湯呑で、篠田が茶を喫んで居たのを見た、と女氣の身を震はして口情がつた。

此の復讐として、私も留めるし、自分でも謹んで居た、醫學生の、あの水族館の名札一件。

「あれを母さんにお言ひつけよ。」  
と、蔭で綾子をそゝのかした事がある。

ト告げたか何うだか、其の返事は聞かれなかつた。以來、綾子は最う此方へ來なくなつたから。――

其までにも、  
「何處の娘だか分かりません、寐る時ばかりの私の兒ぢやないのに、」と母さんが云つた事があつて、學校がへりに直ぐに飛び込むことを禁められた

が、然う云ふ時は、澄まして家の前を通りながら、路地に向つた出窓の中へ、洋傘をトンと入れて、コト／＼と音づれて通つたつけ

いつかなんぞは、ちやうど降り積つた雪を握つて、大きな團にして、ドンと投込んで澄まして行つたものだつたが。

此の二月ばかりは、學校通ひに、出窓の前さへ通らなくなつたのは、母さんが格子戸に見張つて居て、裏木戸から往來させると云ふ。

又漏れ聞けば、婿について本人の意志を確むるのに、親たちが取つた手段は、極めて簡単なものだった。

「綾ちゃんや、まだ學校へ行きたいかい？」

「あゝ。」

「最うお前十七だから、學校は止しても可から

う。

「

「あゝ。」

あとの「あゝ。」で、皆決着。  
是非に及ばぬ。

「自由行動、駕籠だ。さあ、引かっいで逃げませう。」と政が疊を叩く、と従弟が、

「勿論！」  
と机を拊つた。

はじめ苦笑ひをした、お船頭までが。

「行るべしですあ、私は此の髻で、半纏は不可んですで、いつかのお花見の形をそつくり、大森かつらの福助を被つて、袴の股立ちを取るとします。で、宰領の格で、棒先へ立ちませう。」

「占めた、其處で半纏の工夫だが。」

政の方に遣らせつけのがあると云つて、眞個に二枚染めた。

「一生の思出に、私に縫はして下さいな、」と従妹が針を取りはじめたのは、昨日の午で、今朝は早や出来上つたではないか。

で、其の針を運びながら、しく／＼泣いて居る従妹の容子などは、本氣の沙汰ではない。

最初は地主よりも、むしろ、私が一同の要求を斥けて、（此の婚禮を打壊すやうに懸合へ）と云ふのを、親も縁者も附いて居る。第一袴を汚したと言つて、綾子を送つて来たのは紳士の禮を辨へた沙汰で、然もあるべき事を、蛇蝎の如く思ひ取るやうな間違つた奴があるか、と悟して拒んだ、  
自分に對する八ツ當りの示威的に行る、とばかり思つて居たが、幸ひ心當り借りる處がある、と云つて、お船頭が駕籠の才覚に事實出懸けたので、私は驚いて午前から家を遁出したのであつた、産婦の懸念に、じつとして居られないで、卑怯な亭主が遁出すのも、幽霊が恐いと云つて、天窓から夜具を引かぶるのも同一心持のものに見える。

泰然と本を讀んで居ても、産れるものなら、おぎあ、と産れる。目を塞いだ處で、出る幽霊なら出ようけれども。

裏木戸から冷汗は此の所為で。一か八か入つて見ると、それでも心の底には、まさか、と思つた駕籠が其處に。しかも瓦斯燈の灯で見える、灰色に夜のふけた新夫婦が闇と覺しい、雨戸を前に、垣根に押つけて置いてあつた。

寤まずに居られようか。

「さあ、事だぞ。此處へ擔ぎ出したくらゐでは、兎に角町内を騒がせた、悪くすると、洋劍の音ぐらゐはしたらうも知れぬ、狂人沙汰は、火沙汰と選ぶ處はない。」

と茫然とした體は、狸の所為で、あらぬ處へ駕籠が出た、と同然に、我ながら化かされた風にも見えて動かれぬ。

九

ざら／＼ざら、さ／＼らで顔を洗はれたやうに思ふ  
と、近くの湯屋で、板の間を洗ふ音。

其の中空の煙突が、尖つた峰のやうに見えた。幽  
に吹靡いた名残の煙が、蜃氣樓中の火山を見るやう、  
ほんのりと薄赤い、ト其の色で雲が分れて、仰いだ  
空が朧になる。

表通りは、灯を便るし、路地は廂合の暗さに紛れ  
て、それまでは見るものとも、見えるものとも思は  
なかつた傍の樹々の緑は、艶はなけれど、くつきり  
と種々の形に黒い。結繞らした竹垣の其の竹の、く  
ひ違つた節もこんもり浮く。但新しいに似ないで、  
荒果てたものゝ如く、處々傾き、倒れ、且つ大穴の  
あいた風情なのは、更けむとしつゝ移行く雲のたゝ  
ずまひと、夜の隈とが映るのである。

松葉の香頻也。屋根にかゝつた木の葉はないが、  
路を塞いだ駕籠は、森の中なる風情して、我は山路  
に蹈迷ふ。不思議に里を隔てたやうに、近頃疎くな

つた絲卷の雨戸は、然も今夜、婿の手ならでは透あ  
らせじ、と嚴重に、犇とあつて、唯見るにさへ心苦  
しい。

打背いて、小公園の樹立を見ると、松の根を透き、  
梅ヶ枝を洩れながら、木瓜の紅があからさまに、瓦  
斯燈の明に映つた――今を盛と思はれる。

松明を束ねたやうな、二耀たる此の盛春の錦木は、  
日中は只美女の血潮が漲つて、太陽の色をさへ焼き  
亡はんつ、見るものゝ目は、其の花の中なる金色の  
光に眩くが、いま恁くて、新婦が緋縮緬の姿を偲ぶ。

熟と見る内、目前へ紫の光が絡んで、薄い萌葱が  
一揺れ揺れると、蒼くなつてフト失せた  
あゝ、風に煽つたのではなく、上へ吸取つたやうに、  
恰も爾時、瓦斯燈が消えたのである。餘り急で、未  
だ「絲卷」とした幻の字が見える。

のみならず、吸ひ消された火が、私の瞳を去らな  
かつた。廂を壓して、大釜の、赤錆にさびて青い水

を湛へた用水の、格子と並んだ、庭へ入口の木戸の間に、づつしり据つて、如何にも金物屋が此處へ根を下ろさうとした其の思ひのほどの料られる、數千尺の地の底から生拔になつて居さうで、近まはりは、歩行くとカーンと響きさうなのが、此の時歴然と顯れた。

瓦斯の灯をフイと吸ひ取つたのは、此の古釜であるらしい。ふちに搦んで、底へ潛つて、しばらく燃ゆるやうに見えたから。

象は可忌しい。  
婚姻の夜と云ふのに、本家傳來の大釜が、此の現

身ぶるひして目を外らすと、これにもなごりは消えやらず、木瓜の花の紅は、尚ほ朦朧と其處にイむ。

これでは動き出さうも知れぬ。  
然う云へば、新婦が廊下を通りはしないか。

否其には限るまい、廁の水口は直き其の雨戸の端にある、誰が開けても、こゝに人があるのを見よう、

と思はず懸念の駕籠の柄に手をかけた。ト其の塗の  
黒いのが、手に映つた。――別に押しも動かし  
もせなんだけれども、ひたと其の駕籠が袷の袖に應  
へて重い。

尤も、元來輕かるべき所謂はないが、此の時重  
く應へたのは、中が空ではないやうな氣がしたので  
ある。

然うだ、情も、愛も、嫉妬も、罪も、佛も、鬼も  
籠るものを、と漫に身に沁み、冷たく鐵の柱から手  
を放すやうにした時、ふつと浮いて、駕籠の戸を、  
白く離れたものがある。

ひらり、向うの柄を流るゝやうに、ふは／＼と舞  
上つたのは一羽の蝶々。  
と誘はれるやうに足が浮いた。

時に薄月が雲に透いた。影は弱く、地の上までは  
射通さぬが、蝶々の羽は透したか、冷い陽炎となつ  
て消えた、と思ふと、薄り、木瓜の紅が、羽を桃色

に目前に映して漾はせた。

もう公園を向うへはづれて、眞直に、我家の門に面したのである。

此の稍擴い路地を、ひら／＼、と吹きもせぬ風に漂うて行くのに、誘はれて歩行いた時は、唯あれ、あれ、とばかりで、踏む路は蹠に、恰も高くふつくりと綿を踏んだ。

自家の格子戸戸と直角に、すぐ庭へ通る開戸の木戸一ツ。

此の上を越した時、蝶の姿が一番衝と高かつた。翼が搦んで、月の輪へ、袱紗をかけたやうに成つたが、はらりと外れて、低くなつて庭へ入つた。

遅く歸る時のために、何時も此處だけは開けてある。

すぐに押すと、音もしないで開く。

あとを締める氣もしないで、其まゝ衝と潜つて入  
ると、廻縁の此處は、隣家の竹垣と、我家の雨戸、  
並んだ四枚に、草の影すら／＼と、間は細長い庭に  
なつて、秋草を植ゑて置く、萩の盛には花の露が、  
縁へ紫の雫と落ちる。

其その萩はぎも、藤袴ふぢばかまも、桔梗ききやうも若葉わかばで、まだ葉はと葉は、  
 莖くきと莖くきとは間あひを置おいて、隣となりの垣かきねの、すら／＼と竹たけが  
 透すく のに、小ちひさい葉はには紛まぎれまい、薔ばら薇ら  
 の花片はなびらほどはあつた蝶てふの、何處どこへ宿やどつたか此この秋あき草くさ  
 の中なかには見みえぬ。

なつかしさに、跡あとを慕したひ、葉はずれに其處そこを辿たどつて  
 出でると、廂ひさしを載のせた柱はしらが立たつて、雨戸あまどがぐるりと庭には  
 へ折をれる、此この角かどから、五坪つぼばかり、これも向むかうを  
 茶ちやの木きで仕切しきつた、下したが崖がけで、品川しながはまでは屋根やねの波なみ、  
 晴はれると富士ふじが空そらへ浮うく、見み露はらしの此この花園はなその。埴生はにふの  
 宿やどの背戸せとながら、花はなのためには園そのとせよ。

雛菊ひなぎく、堇すみれ、櫻草はなぐさ、雛菊ひなぎく、堇すみれ、櫻草はなぐさ。揺ゆらめく簪かざし、  
 香かある玉たま、紫雲英げんげの雲くもの紫むらさきが、其その簪かざしを乗のせ、玉たまを  
 敷しき、銀河ぎんがを渡わたる橋はしかと思みゆる飛石とひしを繞めぐつて居ゐる。  
 春雨はるさめなれば一重ひとへよし、梅雨つゆには蓑みのなす八重山やへちやま吹ふき、夜よ  
 の間まに濡ぬれを乾かわかすか、黄色きいろな霞かすみが倂おもかた立たつ。

花菱草は黄金の杯を露に傾け、  
へるやう。千鳥草の美しさ、夕日の浪の五色に砕け  
て、海松にかゝるに異ならず。虞美人草の脣は、東  
雲の雲を分けて、紅玉の面を接吻しよう、と夢にも  
ほんのりと面を染める。

折から誘ふ風もなく、音信るゝ鐘もなく、眠りし  
か、覚めたるか、幻の色ばかり打搖ぎ、むら／＼  
と美しい呼吸の霞を吐いて、薄月を包む雲の上を、  
淺黄に、朱鷺に彩つて、誰が取出で、咲くともなく  
蒼むともなく枕を並べた。

其處へちら／＼、臺を潜り、花に乗つて、仄に白  
くほのめくのを  
今また見つけた蝴蝶の翼  
の、軽く浮き沈みする状は、ふつくりした娘の手ら  
しい。

何時も其の姿で戯れた、綾子の姿を思出したが、  
フト又他のものゝやうにも見えた。蝴蝶の此の手は、  
花を摘むのではなく、花を育てるものゝ如くなれば。  
考へると、白露で虹を解いた繪の具のやうな、種々  
の花の微妙なる色彩は、こんな時、天女が来て、蒼

を一ツ一ツ染めて行くのであらうも知れぬ。

繪筆持たずに、手でなしに、白きは其の袖、緋なるは其の褌。打かさなつて透いて揺れゝば、絞ともなり、斑ともなり、隈ともなる。黄や紫は帯の綾。映せば映り、宿せば宿つて、蒼は天衣の色に咲かう。櫻のやうな高い樹は、袂を開いて蒼空の、朝日、夕日の影を染め、颯と翳して梢にかける、と霞が取つて咲き擴げよう。

貝殻草の堅いのは、花の女神の人さし指の、密と指す爪紅に彩られたか、と疑はるゝ。

然ればこそ、浦島草の色の單純なもの、我が繪具の、紅を解いても、緋を染めても、朱を灌いでも、黄を彩つても、同一美しさは染め得られぬ。いづれか天の匠ならざる。

花や霞の其の佐保姫、もみぢに霧の龍田姫、わが花園に在るは誰ぞ。

あかつき  
曉や人はしらずも桃の露

ときこの白雄の句を思ひ浮んだ、桃の露の曉さへ  
知らずに過す  
―― 臙に艶ある現の花の眞夜中  
に、神來らじと誰が言ふや。

花はものいはぬ、と世は信ずる。非ず、言はざる  
にあらす聞かないのかも知れない。黄菊白菊、菖蒲  
の冠、萩の褙、嫁菜の花の一枝をも、戀ひ、慕ひ、  
憧れ、悶えて、戀人の如くせよ。浴した胸に抱け、  
清らかなる額に翳せ。莖は血潮の色に出て、蕊の戦  
ぎは戀を囁く。

従妹弟にも、我が友にも、失はれたる綾子のかは  
りに、いで、花束を、と思つたが、いや、しばらく、  
其處に花守  
彼處へ、彼處へ、――  
指が見ゆる、花がくれに、手が露はるゝ、葉の上へ

――

蝶の姿の揺めくを、硯の水に響くやう、靜に熟と  
瞻るほどに、其のはたらきを妨げるやう、我がら憚

られたので、片隅に寄つて蒼い塗笠、をかしく傾く  
芋の葉のかげに踞る。と立籠む薫が馥郁として、心  
ゆくばかり芬とした。

眉に迫つて白百合一輪、すつと俯向けに、たら／＼と露を受けて、昨日一昨日まだ蒼たつたのが、今咲かされたか開いて居た。

蝶は此處から、舞ひはじめたらう。

ト揺りと振りいたやうになつた。トタンに来て、蝶々は、白銀の鈴のやうな百合の花に翼を休めた。

其の羽が言合はせたやうに、頷いたやうに、人の目を忍ぶやうに、縋るやうに、其の癖たよりなさうに、密と寄ると、姿が片々になつた状に熟と留つて少時動かぬ。

離れた時は、女神の如く、崇高の念に打たれたが、恚う近々となれば、切凡夫の、唯蝶々の愛々しい。

其處で思はず頬を寄せた。

其の相觸れたる時、蝶の膚の滑さは、我が綾子の

翼つばねに似にた。

まだ何等なんら、意いを運めくらす暇ひまもなく、其その蝶てふが力ちからなげに、はらりと落おちた。落おちた處ところが、櫻草はなぐさ、雛菊ひなぎくの上うへだつたら、紫雲英げんげだつたら、枕まくらをかへて寝返ねがへりしたか、天てんへ歸かへつた事ことと思おもつたのであらうけれども、恰あたかも芋いもの葉はの傍かたはらで、其處そこが地つちだつたので、ハツとした。思おもはず、指ゆびがふるへた所せ爲ゐか、其その時とき罷ふれると、冷つめたかつた　――　蝶てふを掌たなに据すゑたが　飛とばぬ

袂たもとに燧火まつちがあつたのに心こころ着ついて、急いそいで、地つちに置おいて片手かたてで擦すつた。

しゞまの折をりから慌あわしい、ぱツと燃もえる、と此この光ひかりに驚おどろいたか、こは如何いかに蝶てふの首くびに、しつかりと喰くひついて居ゐた蜘蛛くもが一ひとツ。血ちのやうに、ぱたりと落おちたが、其その色いろは青あをかつた。

咄嗟とつさに、冷却れいきやくした全身ぜんしんの血潮ちしほは嚇くわつとなつて、足あしを擧あげて蹂躪ふみにじらうとした。

が、待まて、待まて。蜘蛛くもは血ちと肉にくに餓うゑて居ゐたかも知しれぬ。

從いとこ妹弟とこだちよ、友ともも聞きけ。

いづれも同おなじ一人間にんげんである。

あの、可かれん憐むすめなる娘むすめの、其その手てを携たづさへ、其その頸うなじを抱いだくを見て、われらがひとへに、唯たゞ愛あいのみを感かんずべきは、大だい慈じ大だい悲ひの觀くわん世ぜ音おんでなければならぬ。

獅子しし、白びやく象きやう、猛まう獸じうの許もとに美うつくしき其その姿すがたを跪ひざまづかせて、われらが、ために見みて、芙ふ蓉よう、薔ば薇らに齊かしづ眉まゆくやう、些さの畏おそれ怖おそと、不ふ安あんを感かんぜざるには、其そ處こに居ゐ給たまふ菩薩ぼさにして、普ふ賢けん文もん珠じゆの他ほかには在おはさぬ。

瑜ゆ伽かを奪うばつた旅たび商あきうど人は、血ちを吸すひ肉にくを嘗なめたとす。渠かれに憧あこがれた里さと人びとの誰たれも彼かれも、われらが目めには、齊ひとしくこれ、鶯うぐいすの細ほそ頸うなじに花はな笠がさ被きせ、蜻とんぼ蛉ばの尾をに松まつ葉ばさして愛めでくつがへる其それならずや。

可よし、我われ汝なんじを損そこなはじ。

蜘蛛くもはさら／＼と又また白しろ百ひゃく合ごうの花はなにかくれた。

恍うつとり惚として離はなした蝶てふは、ひらりと舊もとの處ところへ留とまつた。

さては 接キス吻スして居ゐたのであつた。言いはぬ

ことか、私わたしは徒いたづらに、其その夢ゆめを覚さまし、其その眠ねむりを驚おどろかしたのである。

蜘蛛よ、青き蜘蛛よ、

香に酔へ、花に眠れ。

巢を営むこと勿れ。

血と肉とに餓うとならば、

汝が犠牲を妨げじ。

さりながら礫柱のあたりを選べ、

なせそ、花の中に潜むことを。

と言不束、眞心に打念じて、眼を開いた時は、白

き其の翼を被いで、一人は高島田に筭さして、蒼

白い、あの醫學生の顔と、並んで、互に莞爾とある

のを見た。

あゝ、祝着 侯。

【完】

